

伝統の地に 福知山駐屯地

第7普通科連隊他

駐屯地シリーズ編纂委員会

福知山駐屯地

多くの読者には福知山市が京都のどの辺にあるか説明が必要かも知れない。京都駅から舞鶴方面へ走る山陰本線特急で約1時間40分、約60kmほどの位置にある。人口が約8万の地方都市でありながら、明治18年、京都府下では二番目に市政が敷かれたと云う歴史ある都市である。京都を出て30分を過ぎると、列車は嵯峨駅を過ぎ、幾つかの短いトンネルをくぐり、車窓の景色は完全に盆地内の農村風景に変わり、それが幾度か繰り返された。水田・畑地に耕作放棄の景観は少なく、セイタカアワダチソウの黄色い畑地等はその盆地に2、3カ所見えるのみである。

やがて列車はやや広い盆地に進入した。福知山盆地である。四方を小高い山に囲まれた直径約数キロの盆地の中には、途中の小さな盆地と異なり、ビルの並びが見え、やがて速度を落とし、列車は駅に停車した。高架の駅から

瞥見する駅前市街地はそれほどの高層建築物は見当たらないがビルの屋上には広告看板が連なり、この地域の中心都市としての経済活動の様子が伺える。駅の東ほど近い市の中央には由良川と云う暴れ川が流れている。この暴れ川との格闘の歴史は遠く戦国時代の領主武將明智光秀の頃まで遡る。光秀はこの川が暴れて堤防が決壊する地点に竹を植えて藪を作り堤防を強化したと語り継がれ、以後何度か洪水の被害と闘いの歴史は陸軍時代、自衛隊時代に繋がっている。

駅舎入り口に立つと、歩く人などどこにも見えない激しい雨であった。駅から駐屯地まで徒歩20分の距離を、駐屯地草創期に多くの先輩方が辿ったであろう道を歩いて当時の雰囲気浸つてみたかったのであるが、大雨の中をずぶ濡れになるほどの用意も心構えも無く部隊の好意に甘えて、迎えるの車に乗り駐屯地へ向かった。

駐屯地の歴史

営門に着くと、当今のテロを警戒する態勢で車両進入は強固に阻止されており、ドアを開けて中の乗車者を確かめてから拒馬を移動させるという厳重さである。営門から右手の屋上に国旗掲揚塔のあるベージュ色の本部隊舎があり、その並びに事務棟隊舎、居住隊舎が見え、よく手入れされた枝振りの良い松が植わったロータリーがあり、その先に表面が砂の広い営庭が続き、おりしもの激しい雨で水浸しとなって隊員が水しぶきを上げて早駆けて横切っていた。

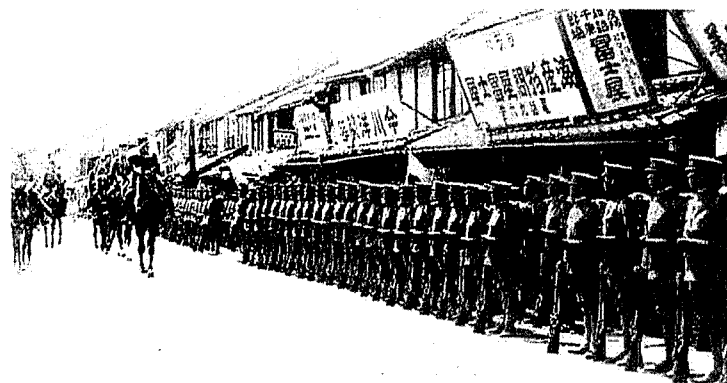
戦前この駐屯地には陸軍歩兵第20聯隊の兵営があった。聯隊は明治18年軍旗拝受、当初大阪にあったが明治31年日清戦争後に福知山に移駐してきた。それ以来今日に至るまで地域住民は心の奥に歩兵第20聯隊に愛着と哀惜の心を抱き続け、その余慶は今日の福知山駐屯地を暖かく見つめる市民の感情に引き継がれている。

愛着の所以は警察予備隊の頃、福知山移駐3年後の災害派遣が大きく影響していると考えられる。市内を流れる由良川が氾濫して大被害を受けたが、街中の最大水位は7メートルにも及んだ。そして40名が死亡、900名が負傷、1千100戸が全半壊、5千300戸が床上浸水と云う壊滅的被害をうけた。その災害に敢

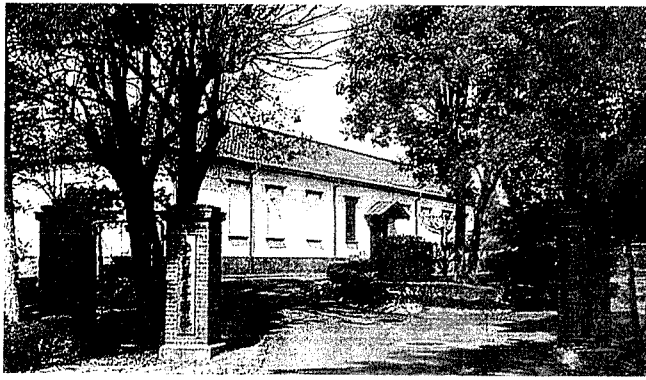
然と出動したのが警察予備隊であった。このときの働きが深い感銘を与え、市民は長く駐屯地を支え続けたのである。

哀惜は歩兵第20聯隊の戦歴、特に大東亜戦争における聯隊の終末に人々が哀悼の心を捧げるからであろう。その歴史を辿って見たい。

日清戦争では当時大阪にあった聯隊は大陸に渡り、大連湾地域に集結したが戦闘に参加することなく終戦となり



駅前通に整列する20聯隊



旧将校集会所

帰国した。

日露戦争では既に移駐していた福知山から出征し、遼陽城を落とす、野津軍司令官から感状を授与され、福知山に凱旋している。

満洲事変が勃発すると聯隊は昭和9年大陸に渡り新京、吉林を転戦し昭和11年には福知山に凱旋した。その後支那事変勃発により昭和12年再度大陸に渡り南京攻略に参加し、徐州会戦、武漢攻略等に活躍、14年8月20日に凱旋した。昭和16年の大東亜戦争勃発の報は奄美大島附近の輸送船上で受け取

り、フィリピン攻略作戦に参加した。マニラ攻略後米軍が後退盤踞したバターン半島の攻撃に参加した。第二次攻略作戦においては戦力を残して後退し持久戦を挑んだ敵に対して追撃的な態勢で攻撃し、戦闘は困難を極めた。

この戦闘において海上機動により敵後方に迂回し包囲を企図した第2大隊は上陸地点を誤り米軍に包囲され、2月7日全滅した。聯隊長自ら指揮する第3大隊は敵軍包囲され、飢えに苦しみながらジャングルを彷徨し、漸く脱出した時は30余名を残すのみであったと云う。バターン半島攻略は戦力を増強した後わが第14軍により再行され、長い籠城に疲れていた米軍は降伏した。以後聯隊は昭和18年11月にレイテ島に上陸し警備についた。

昭和19年10月戦況悪化して米軍のレイテ上陸に際し、聯隊は海岸線に水際配備して集中的な艦砲射撃に先ず第3大隊が壊滅的被害を受けて絶望的な切り込み戦に移行し全滅した。聯隊本部は艦砲射撃の直撃により聯隊長が戦死、残る第2大隊はブラウエン飛行場を死守すべく地雷障害を構築し、第一戦は白兵戦に至ったが、後方からくる火力の集中を浴びて転進止むなきに至り、その後レイテ島で力尽きて玉砕した。

この聯隊将兵への哀惜の記念碑とも

云うべきモニュメントに触れて見たい。一つは歩兵第20聯隊の跡地を後世に語り伝えるべき「歩兵第20聯隊の記念碑」であり二つ目は明治建軍以来国防に任じて散華された幾多先輩の霊の冥福を祈る「留魂の碑」、三つ目は歩兵第20聯隊将兵が事あるごとに神の加護を祈った「鎮国神社」の跡地に第20

聯隊・第120聯隊の英霊を悼み慰める「鎮国の碑」、四つ目は、現在「垣将集館」の名の下に駐屯地資料を収めている元陸軍歩兵第20聯隊将校集会所の建物がある。この垣将集館は明治31年招聘した英国人技師の設計による当時の技術を結集した将校集会所であり、現在も往時の黒色の屋根、白い壁、赤い土台の外観を保っている。中は自衛隊コーナー、郷土史コーナー、旧軍史コーナーの3つに分かれて合計約2千

の展示物が収蔵されている。中で郷土史コーナーの「赤穂浪士の絵画」と旧軍コーナーの召集令状請け書(赤紙)は特に心を惹かれた。「絵画」は押し絵で作られた傑作で、本元の赤穂の記念館でも欲しくて堪らない代物として譲り受けの申し入れが有ったという。召集令状(請け書綴り)は令状を送達した相手から受け取った請け書を残して、約4〜5センチの厚さに編綴された物であり、手に取るとこれを受け取った場面が目に見えかび壮丁の心の

様々な動き・動揺が想像出来るものがあった。また此処には歩兵第120聯隊に因る展示物があるが、歩兵第120聯隊はこの駐屯地ではなく昭和13年長田野演習場廠舎で編成され、中国大陸を転戦した聯隊であり同じ福知山の郷土部隊のモニュメントとして市民や隊員の追憶の心を掻き立てている。

この場所は終戦後暫くは旧国鉄が教習所として利用していたが、昭和25年警察予備隊発足によりいち早く誘致運動が起りその年12月には1千800余名の「警察予備隊福知山部隊」が発足した。その後昭和37年には新編第7普通科連隊の駐屯するところとなり、今日に至っている。

駐屯部隊

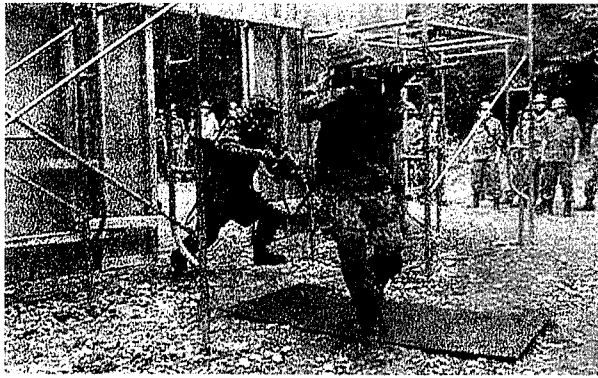
現在駐屯地に所在する部隊は次のとおりである。

第7普通科連隊

京阪神政治経済中枢を隊区とする第3師団の隷下連隊であり、宇治川以北の京都を隊区としている。副指揮官たる副連隊長、人事・情報・運用訓練・兵站・通信を所掌するそれぞれの幕僚、付陸曹からなる連隊本部、本部管理中隊、第1〜第5普通科中隊と重迫撃砲中隊からなっている。なお連隊長は福知山駐屯地司令をかねている。

第3後方支援連隊第2整備大隊

第1普通科直接支援中隊



武装工作員等に対処する訓練

指揮系統上は第3後方支援連隊の隷下部隊であるが、任務は第7普通科連隊の兵站支援を行う部隊であり、従って日常及び野外行動時は第7普通科連隊と密接な行動をする部隊である。

福知山駐屯地業務隊

中部方面総監に隷属し駐屯部隊及び隊員個々に対して、総務、管理、補給、厚生、衛生（医療）の支援を行うことを任務とする部隊である。具体的な業務を挙げれば、市役所等行政・地域自治会等との窓口、郵政、隊舎・官舎・訓練場の維持管理、補給品の受け入れ・配分、隊員の娯楽・貯金業務、官

舎の割り当て、隊員の健康管理・医療等広範多岐にわたる。

第349会計隊

駐屯地における物品の購入、契約、金銭出納を行う部隊であり、方面会計隊の隷下部隊である。

第318基地通信隊

隊外との電話を中継する駐屯地交換所を運営し、また自衛隊通信系の福知山端末を運営する部隊である。

第115地区警務隊

隊員の規律維持に当たる部隊であり、警務隊員は特定範囲の司法警察官業務を実施する。

胸をはって市中パレード

現在全国で創立記念日のパレードを市内目抜き通りで実施できる駐屯地はそれほど多くはない。その市中パレードを、自衛隊の姿を何ら臆することなく堂々と胸を張って実施しているのが此処福知山駐屯地である。

この稿執筆段階では平成19年度パレードは創立記念日前日の市中パレードと創立記念日は予定の段階である。

前々年の市中行進の写真集から述べて見たい。写真を一見してまず度肝を抜かれたのである。繁華街にしつらえられた観閲台にはおそろしく市町村の有力者であろう。胸に大きな飾り花をつけた人が多く陪閲し、その両脇の一般観閲者席には溢れるばかりの老若男女

の笑みに輝いた顔が並んでいる。観閲官たる連隊長兼駐屯地司令の服装は礼装ではない。イラクに派遣された時の防弾チョッキ姿の言わなければ野戦服である。指揮通信車に乗り観閲部隊を指揮する副連隊長も精悍であり、指揮下各行進単位部隊は更に精悍であった。その服装が単位毎に異なるのである。顔中に迷彩を施し、スリンググローブを身に絡げた精鋭レンジャーチームがあった。

脅威の多様化時代市街戦下でこの物陰からテロを仕掛けて来るか分からない中を行動するため銃を構えて照準姿勢を崩さず行進する一隊があった。炎熱の砂漠の中を一瞬たりとも警戒を解くこと無く移動した派遣隊員たちの姿があった。

鳥インフルエンザの発生で白い防疫服に身を固めた異様な、しかし、精悍な一隊は観閲者の記憶を強烈に呼び起こした。災害発生時には迅速に出勤して強力な重機で復興に当たることを示す重機材を積載した車両の行進があった。

その他様々な趣向のこの時の市中行進の意味するところを考えてみたい。筆者の考えるところ、これは一つの挑戦だったのではなからうか。これらの扮で装ちは決して奇を衒うための物ではなく、自分たちのありのままの姿を

表わそうとしたものに違いあるまい。なによりも実績に基づく自信と誇りがなければこんな姿にはなれないであろう。OBとして嬉しさを以てこの挑戦に冒險心に拍手を送りたい。この駐屯地の今回のパレードを実際に見ることが出来なかったことがつくづく残念でならない。

レンジャー試行の地

レンジャー訓練は昭和30年、陸軍出身の2名の幹部が米陸軍歩兵学校を卒業したことに始まり、日本に於ける訓練開始の試行の場所として選ばれたのが京都北部の土地であった。試行後間もない30年10月に課程教育の場は富士学校となったが福知山でも33年に開始された。レンジャー訓練試行間に育成された助教の存在がいち早い訓練開始を可能にしたと言われている。

災害派遣暗

福知山盆地には、由良川と云う暴れ川があり、福知山駐屯地部隊は常にこの川の警戒をするとともに、水害、地震等の災害時に備える多くの隊員の日頃の精進と活躍があった。この中の一つの事例は、筆者に心からの慶びを満たす事例である。その事例を述べて見たい。平成18年7月19日梅雨前線の停滞による大雨が丹後地方を襲った。この時出勤したある中隊の前面に、土砂が埋まり2階部分が崩壊した民家が

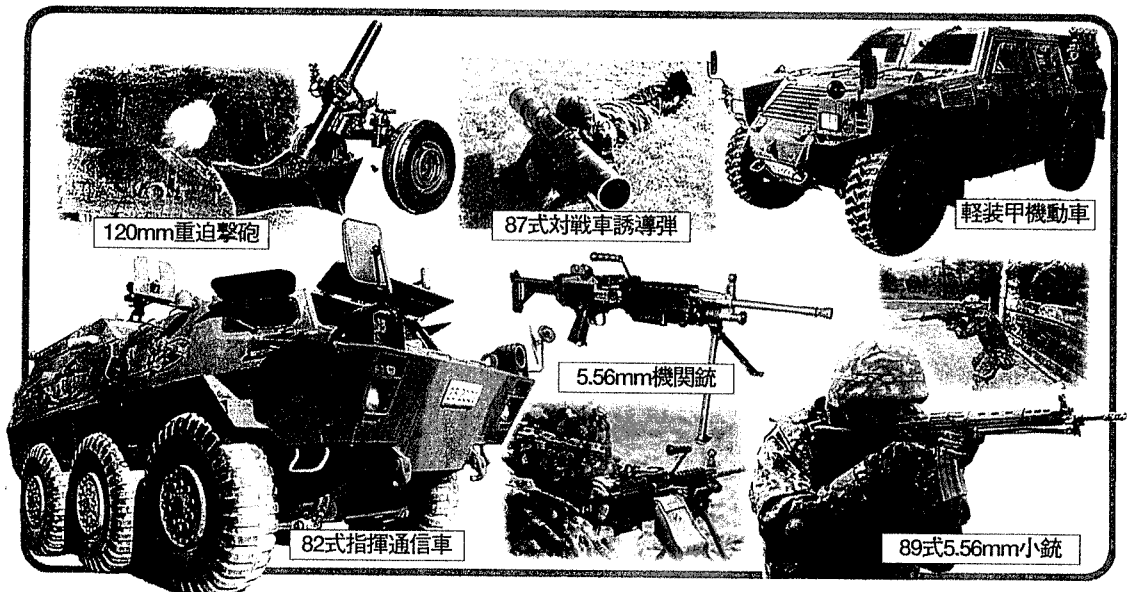
あった。行方不明者が閉じこめられていると見られたが、一見して中に入っている救出活動が危険である事が分かる状態であった。此処に一つのドラマが展開された。

以下要旨産経新聞の記事引用をお許し願いたい。「危険だが俺と入ってくれるか」全員「行きます」中隊長は嬉しかったと云う。中に入る隊員の指名は目で合図した。危険を前にして発揮された以心伝心の境地である。中隊長を先頭に崩壊した建物に入ったが残念ながら被害者を生存したまま救出出来ず、遺体を収容したと云う。中隊長はこの時の活躍と過去の災害派遣の積み重ねに対して産経新聞社から「国民の自衛官」として表彰された。感想を聞いたところ只一言、指揮に従って危地に入ってくれた部下に対しての感謝の発言があった。中隊長の名前は杉岡勝一等陸尉と云う。この出動が始めてでは勿論ない。平成2年に生じたマリタイムガーデニア号座礁油流出に際しての派遣には結婚式10日前に命令を受け、帰隊出来たのは結婚式2日前だったとのことである。普通の日々ではない。晴れの日を前にいろいろと直前に準備処置すべきことが山積する日々であり帰隊後直ちに3日後の新妻と会つたに違いない。流出油は爪や髪や皮膚の皴に入り込みそれが猛烈かつ不快な

臭気を発していた筈である。一日くらの洗淨で消えるものではあるまい。それに耐えた新妻の忍耐力も又表彰の一助であったのだろう。命懸けの救出に従事した夫について感想を問われた時の返答は「結婚前から覚悟していましたから」。共に寄り添い風雪に耐えてきた夫婦の姿があった。

次は平成7年阪神地方を震度7の地震が襲った後に伝え聞いて思った筆者個人の身を切られる様な切ない私見である。発災直後、神戸市も兵庫県も政府も周章狼狽し、真つ先に成すべき必要な人命救助のために自衛隊に出動を要請・命ずることが無かった。失念していた筈はない。伊丹の中方総監部もしくは第3師団司令部から連絡幹部が派遣されていた筈であり、その市役所県庁到着が著しく遅れたと云う記録は何処にもない。市役所県庁の役人で連絡幹部に会った者がいたはずである。しかし派遣要請は出ず、従つて出動命令は出なかつた。一方テレビは映像を一面の被害現場の倒壊家屋・地割れや幾重もの煙を報じていた。この状況を見て当時の第7普通科連隊長は、まず自らの警備隊区の京都府内が大丈夫だと云うことを確認し、出動を予測して準備を命じたが、いつまでも出てこない出動命令には焦燥の想いに身を焦がしたであろう。「自分たちは国民を守

普通科連隊 (歩兵) の装備品



るためである。今が正にその時ではないか」選択肢は二つ、規定を守って何時出るか分からない命令を待つか、その結果多くの人々を見殺しにする結果も起こりうるゆえにフライングをしてでも危機に瀕している住民をたすけるか。懊悩の末連隊長は出動を命じた。現地に近い姫路の第3特科連隊から入る甚大な被害の情報が焦燥に拍車をかけた。後になって、命無くして部隊を動かした故を以て非難されたと云う。我が身に置き換えて連隊長の胸中を推察した時感情が激しく揺れて収まらなないのである。私見であるが、筆者は連隊長と同じ決心をする男でありたい。当時の法規規定上違反であったが、これは明らかに規則そのものに欠陥があるとして、後に法が改正されたではないか。ならば退官後の今からでも遅くはない。非難を取り消しの上、人事記録を訂正し生涯の名譽を回復させるべきではないのか。筆者の心からの願いである。

駐屯地司令との一時

事前に連隊長兼駐屯地司令岸良和典1佐に時間を割いて頂けると云う連絡があった。筆者は防衛大学の期が古い、対する連隊長は遙か後輩とは云いながら部隊と隊区を預かる重職にある。当方にもし不遜な言葉使いや馴れ馴れしい態度があればこれは相手に不



快を与えるだけでなく、自分自身の人格の卑しさを露呈するものである。現に戒めなければならぬと思った。次に、仮にも連隊長兼駐屯地司令に質問するならば浅薄なものであつてはならないと考へた。これは実に肩のこる、喉の渇く一時であつた。

尋ねたのは「連隊は今何に最大の勢力を投入しておりますか」と云うことであつた。間髪を入れない返答があつた。「至てです」。自信に満ちた表情で

あり、同時に筆者が事前収集した知識に多くの点で結果的に合致する所であつた。武装勢力の侵入適地の丹後半島の地形情報収集、原子力施設が連続する敦賀湾、テロ対象施設が無数にある京阪神地区、氾濫が油断出来ない由良川、新しく任務に加わった海外派遣任務、先輩が心血を注いで築き上げた

地域との関係、募集基盤の立て直し、隊員募集態勢への協力、部下隊員の再就職先開拓、12月中旬には着隊する幹部候補生の新しい考え方に基づく隊付き教育、考えるべきことは数限りがない。しかしながら連隊長は、これら全てに対して部下指揮官募集僚を督励し、任務の完遂を目指して情熱を燃やしていることが感じられ頼もしいかぎりであつた。

この間取材と云うより素人の自分が講義をうけているような錯覚に捉えられた。そして瞬く間に時間が過ぎたのである。実に有益な一時であつた。

今回の取材に当たり、特に時間をさいて頂いた連隊長、駐屯地広報室寺岡室長をはじめ広報室の皆様から感謝したい。

参考資料として

産経新聞

靖國偕行文庫所蔵図書

を参考・引用させて頂いた。

追記

大方の方々をご存知と思う。

今回目出度く参議院議員に当選された佐藤正久氏は此処の連隊長兼駐屯地司令を務められた後、退官し政界に転じられた。方向変換後も益々活躍を祈念致したい。福知山駐屯地に縁ある人々も同じ心と信ずる次第である。